

Title	大内氏の文化(上)
Sub Title	
Author	伊木, 壽一(Igi, Hisaichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1922
Jtitle	史学 Vol.1, No.3 (1922. 5) ,p.1(351)- 29(379)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	口繪:大内義隆の遺詠(赤間宮所藏)
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19220500-0001">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19220500-0001</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

大内義隆の遺詠

くしのがしほは君のうらみ  
きようの自らのまはる

(赤間宮所藏)

# 史學

## 第壹卷 第參號

大正十一年四月

### 大内氏の文化（上）

#### 一 文化の曙光

戰國の世、天下は麻の如く亂れて、所謂暗黒時代を現出し、文化の光は何處にも認められなかつたかの如く思はれるが、その實この時代と雖も全然消滅した譯ではない。勿論一般的には他の時代に比べて劣るかも知れぬが、文化の種類によつては、より以上に發達したものがあるのである。殊に前代より養ひ來つた文化は、縱令戰亂のために衰へたとはいへ、未だ根本より覆さるゝには至らず、中央に於てこそは戰塵と化したれ、地方にありては却つて發達を來し、一方盛んに輸入せられた大陸文明を攝取して、臙て來るべき復興時代の文化を醸成するに至つたことは、争ふべからざる事實である。而して我が大内氏が、西陲形勝の位置に在りて、その富強天下に冠たるとともに、内外各種の文化を收容して、叢爾たる山口の地に當時無比の精華を發揮せることは、正に魍魅魍魎の暗夜に平和の曙光

を天の一方に望ましむるの觀がある。而も國家一度滅んで遺芳永く埋もれたり、徒に文弱の譏を受けつゝ、東蘆一片の烟と消えし大内氏の末路を憐むものは、またその文化的事蹟の著しきものあるを認むべきであらう。

## 二 大内氏の歴代

大内氏の文化、この記念すべき事實を記す前提として、先づ大内氏歴代の大略を述ぶる必要がある。大内氏は人も知る中國の右族であるが、その先は百濟の聖明王の三子琳聖太子に出づと傳へられて居る。琳聖、我が推古天皇の朝に歸化して周防の國に來り、子孫代々吉敷郡大内村なる大内畑に住して次第に根據を作り、盛房に至つて始めて周防介に任せられ、その子弘盛、孫の滿盛は、共に元暦の役に源氏に加擔して勢力を増し、滿盛の玄孫重弘は弘安の役に勳功を樹て、六波羅の評定衆となつた。これまでは如上の事蹟の外殆ど知るを得ないが、重弘の子妙嚴弘幸に至つて、折から鎌倉の末路より南北朝掛けての時代之際會し、或は尊氏に屬し、或は南朝に歸するなど、次第に國史に現れ來り、その子道階弘世に及んでは更に著しきものとなつた。この時長門の守護厚東武實の孫義武を逐うて、周防・長門及び石見の守護職に補せられ、始めて防長を併有することとなり、居を山口に移して、以後代々この地に住することとなつた。即ち大内氏の興隆は鎌倉時代の末期より南北朝の初期に互つてのことで、防長二州が確然と統一せられたのもこの際である。是に於て大内氏は他日雄飛の根據を得た譯で、爾來五百有餘歲、防長は二州にして二州にあらず、全く一地帯を成して居ると謂つてよい。是は勿論大内氏の後に之を領有した毛利氏の力に因るところ大なりと雖も、その基を開きしは實に大内氏なること

を忘れてはならぬ。そは兎も角も、弘幸・弘世の兩代に於て大内氏の勢力は確立せられ、繼て義弘に傳へられたのである。

義弘は弘世の子で、武勇絶倫と稱せられ、十六歳にして今川了俊に従つて九州に出陣せしより、凡そ二十年間、大戰二十八度に及び、武名天下に隠れなき勇將であつたが、殊に明德二年山名氏清の亂に戦功を樹て、翌年後龜山天皇の還幸を斡旋して威望を加へ、遂に周防・長門・石見・豊前・和泉・紀伊六國の守護職の外に、九州探題に補せられ、天下一二の大族となつた。されどこれがために心驕つたものか、關東管領足利滿兼と東西相應じて將軍義滿に反抗し、應永六年十二月堺浦に戦死した。即ち應永の亂である。

是に於て大内氏の勢力は一頓挫を來したが、義弘の弟盛見は兄の遺命を奉じて本國を堅守し、そのまた弟弘茂は之と不和にして足利氏に降つた。幕府は盛見征伐の軍を起し、弘茂に防長を興へて盛見を討たしめた。正に是れ足利時代に於ける長州征伐で、盛見を當年の正論黨とすれば、弘茂は即ち俗論黨と見るべきであらう。戦は遂に盛見の勝利に歸し、弘茂は滅び、幕軍は潰えた。その後盛見は將軍に隨逐し、防・長・豊・筑の守護に補せられて、聲稱朝右に籍甚たるものがあつたが、惜いかな、永享三年六月少貳氏と筑前深江に戦つて陣歿した。彼は實に僧得巖も云へるが如く、精神肚に滿ち、義勇身を忘れし英雄で、應永の亂後、累卵の國家を維持し回復した功績は最も著しいものである。而もその經歷よりすれば、姿貌魁特、音吐震嘶の豪傑風であつたかの如く想はるゝが、その實、軀幹中人を踰えず、和氣藹然たる愷悌の君子であつたといふことである。

さて盛見の死後、弟持盛家督を領したが、舍弟持世之と不和を構へて自立し、永享五年兄を殺して國內を統一した。その後九州方面に轉戦して戦功を顯し、防・長・豊・筑の守護となり、將軍義教に寵任せられたが、嘉吉の變に、將軍に陪從して赤松亭に傷き、程なくそのために卒したので、養子教弘が嗣立した。教弘は盛見の實子で、同じく防・長・豊・筑の守護となり、山口に築山館を造營して居館としたので、築山殿と稱せられて居る。嘉吉の亂後、幕命を以て少貳氏を討てるを始め、屢々筑前・安藝等に戦ひ、寛正六年九月伊豫の河野氏を討たんとして、船中で歿した。

是に於て嗣子政弘が立つて四箇國の守護となつた。その襲封の翌々年は即ち應仁元年で、未曾有の大亂が勃發した。政弘は西軍の大立物として東上し、京畿に連戦して年を経たるが、文明九年山名宗全・細川勝元相踵いで死するに及び、政弘等もまた兵を解いて歸國すること、なつた。政弘歸國の後、幕府の相伴衆に列し、分國中、殊に筑前に於て少貳氏と戦ひ、また上洛して將軍義材義植の六角征伐に供奉するなど、終始軍國の事に鞅掌したるが、明應三年家督を長子義興に譲り、翌年九月、中風を以て卒した。政弘の如きは實に「はかりごとをとばりの内にめぐらし、勝ことをちさとの外にことばり、人〇朝のくにまでその名かくれなかりける」の雲名將と云ふべきである。

政弘に繼いで立つた義興はまた不世出の英傑で、父に後れし後も威名大いに振つたので、明應九年、是より先き細川政元のために逐はれた前將軍義植、越前國より來り投じた。義興乃ち永正五年之を奉じて上洛し、義植は將軍に還補せられ、義興は管領代として天下の政治を左右した。斯て在京十一年、永正十五年に至つて歸國したが、その後は雲州の尼子氏と安藝に争ひ、毛利元就を始め、該國の諸族

兩家に分屬して攻伐絶ゆることなかつた裏に、享祿元年十二月山口に薨じた。この義興の事業は大内氏歴代中最も著しきもので、その官は前例に依り左京大夫なるも、位は父祖に超えて従三位に昇り、而も防・長・藝・石・豊・筑と六國の守護職を兼攝した。之を祖先に求むれば、義弘に於て庶きものありと雖も、義弘は未だ公卿の列に入らず、且つ天下の政柄を掌握するにも至らなかつた。然るに義興に至つては、將軍を擁して全國に號令を發したところ、恰も後年の織田信長に彷彿たるものがある。

大内氏の勢威は義興の時代に絶頂に達したと謂ふべく、尋いで立つたその子義隆の世は、その前半は九州に於ける少貳・大友等諸氏との抗争及び雲州尼子氏との合戦に國力を費すこと多かつたが、後半はさせることもなく、本領は寧ろ太平無事であつた。義隆乃ち自ら足るとなし、武事を緩うして、飲酒詠歌、日々遊宴を事としたれば、縦令、防長以下六國の外に備後を加へて七州の太守と稱し、豪華全盛を天下に誇つたとは云へ、その實上下相卒ゐて文弱に流れ、衰滅の兆は己に冥々の裏に萌しつゝあつたのである。毛利元就の老臣志道廣良に與へたる書に、「少太事○元就の長子隆元も、(中略)おそなく候時、鷹に一段數寄たる者にて候つる、在山口以來、さやうの事一圓數寄候はす候、當世はかやうの事ならては、更山口かゝりなどにては、此境などのすまいは不成事候まゝ、是非共來年は鷹を持候而山へ罷上候而可然候く」と言つて居る。獨り元就のみならず、當時具眼の士は皆その感を同じうしたことであらう。されば一朝陶晴賢の謀叛となるや、忽ちにして大寧寺の露と消え、永く恨を殘すに至つた。時に天文二十年九月朔日のことで、茲に天下の名族大内氏は滅亡したのである。その後晴賢は豊後の大友義鎮の弟義長義隆の姉の子を迎へて、大内氏の名跡を襲がしめたるも、是れ亦晴賢敗亡の後、弘治三年四

月毛利元就のために討滅せられ、大内氏の社稷は絶えて、毛利氏之に代ることゝなつた。

大内氏の歴史は大略此の如きものである。即ち鎌倉の末葉より興隆して、多大の富と兵力とを有し、常に中國西海の重鎮たりしのみならず、屢々京畿に出で、中央の舞臺にも活躍したのであるが、義隆に及び、その本分たる武備を忽にして文弱に流れたために、紀綱弛廢して、遂に滅亡の悲劇を生じに至つたのである。而して大内氏の文化の語るべきものは、またその一般的事蹟に伴ひて、弘幸の頃より現れ來り、榮華を極めた義隆に至つて絶頂に達し、その渾成時代をなすのである。

### 三 時勢の影響

弘幸に興り義隆に極まれる大内氏の文化は、歴代俊秀の恩賚たりと雖も、また時勢の影響に因るところ甚だ大なるを知らねばならぬ。鎌倉時代の末葉より南北朝を経て足利戰國に至る社會状態を觀察するに、鎌倉にありし政治の中心が建武の中興によつて京都に歸り、爾來足利時代を通じて兎も角もその地を離るゝことはなかつたが、中央集權の實舉がらざりしため、前代よりして守護地頭制度その他の理由により次第に形作られ來つた地方的勢力は、更に一層著しきものとなり、殊に戰國時代に入りては常に政治上のみならず、一般文化の上にあつてもまた地方的に著しき發達を見るに至つた。畢竟京都の文化が各地にデストリビュートされた譯で、大内氏の文化の如きは、その最も著しき一例であらう。

そこで第一に申すべきは公家との關係である。足利時代にありては幕府が京都にありしため、諸侯を始め地方武士等の在京せるもの多く、夙くよりして公家衆とも交り、受領の周旋や文藝の指南を頼みなどして、それぞれ由緒も出來たりしが、戰國の世となりては、京都の荒廢と共に公家の式微困窮を



の極に達し、彼等は地方の豪族より種々物質上の供給を仰いだのみならず、縁故を求めて諸方に流寓するもの頻出するに至つた。中にも大内氏は前述の如く歴代京都に深き關係を有したれば、公家衆の來託するもの最も多かつた。試に政弘・義興・義隆三代の間に於ける人々を擧ぐれば、一條關白兼冬・二條前關白尹房・二條中將良豊・三條右大臣公敦・三條左大臣公頼・烏丸准大臣光康・烏丸權中納言冬光・冷泉權大納言爲和・柳原權大納言資定・飛鳥井權大納言雅俊・飛鳥井權大納言雅綱・日野權中納言晴光・廣橋權中納言兼秀・持明院權中納言基規・東坊城權中納言長淳・阿野參議季綱・小槻伊治・清原頼賢・卜部兼右・岡崎氏久・園廣忠・東儀兼康・岡昌歳・出納重弘など、堂上地下の人々は夥しき數に上つて居る。然るに當時公家衆の文化と云へば、詩歌有職風流の外は殆ど見るに足るものなく、管絃蹴鞠等の諸道も兎角廢れ勝ちであつたが、武家にとつては猶ほ有り難いものであつたらしく、直接間接に文學諸道の指導傳授を受けて居る。しかのみならず、公家との結婚も行はれ、大内氏の如きは、既に弘世の妻は三條氏とあれば、其が殘太平記に云ふが如く三條内大臣公秀の女で崇光・後光嚴兩院の國母たる陽祿門院であるとは思はれないとしても、何れは公家の女であつたらうと考へられるし、義隆に至つては、その室は萬里小路内大臣秀房の長女、繼室は廣橋中納言兼秀の養女實は小槻官務伊治の女、側室は同じく兼秀の實子であり、養子晴持は土佐の公家一條房家の次男であつた。されば彼と云ひ此と云ひ、大内氏、殊に義隆が公家化したのも尤もである。況んやその出次は、異國ながらも公家たるに於てをや、大内義隆記に「義隆ノ御心中ニハ、先祖ハ王子ノ事ナレハ、公家ニナラセ玉ハン事勿論シタル事ナリト、内裡ヲアガメ玉ヒツ、二條殿・三條殿・廣橋殿・柳原殿、其外公卿殿上人外記官務北面ノ輩ニ至マテ山口ヘ下向アレバ、歌ノ披講

ニ管絃シ、水ノ縁曲朗詠シ」云々とあるは、善くこの間の消息を語れるものである。彼が後奈良天皇に即位の資を奉獻せる時、久しく絶えたりし太宰大貳を要望して之に任せられ、大府宣を以て命令を發したる如きも、またその公家化せる一證と見られるであらう。

公家に次いで僧侶、殊に禪僧との關係である。言ふまでもなく禪宗は鎌倉時代より大いに興隆せられ、武人は禪僧を以て聽法受學の師と憑み來つたが、その末葉より足利時代にかけては、所謂五山文學の隆盛と共に、益々この方面より詩文の智識を與へられたものである。加之、不斷の戰亂に伴ひ、此等の緇徒を招請して、安心立命の導師と仰げるのみならず、或は政治外交の顧問に備へて、圓頂黑衣の宰相たらしめ、或は和戰仲介の密使に用ひて、陣僧使僧の名を留めしめた。大内氏もまたその例に漏れず、就中、弘世・盛見の如きは、最も修禪の功を積み、佛教的文化の名殘を今に傳へて居るが、義隆の時には仁和寺眞光院僧正眞海・醍醐報恩院僧正源雅・皆明寺僧正堯淵・比叡山寶菩提院法印豪仁・三井寺勸學院なども留錫したことがある。

公家や僧侶の外にまた、南北朝前後より著しく發達し來り、東山時代以後最も隆盛を極めた連歌などの輕文學を始め、謠曲能樂、或は茶ノ湯聞香などの數寄の道、さては繪畫彫刻織物等の美術の業に至るまで、武家の賞翫を得、その保護を受けないものはない。就中、連歌は唐詩の連句の如く和歌の上下の兩句を付け合ふもので、本は公家衆の遊であつたが、元弘・建武の頃よりその法式一定し、和漢・漢和の連句も出來て、武家や僧侶の間にも行はれ、永享前後に至つてはその極盛期に達したのである。彼の菟玖波集を撰んで斯道の先達とせられたる二條良基を始め、一條兼良・同冬良・三條西實隆などの公

家衆の外に、救濟・周阿以下、梵燈・宗砌・心敬・宗祇・兼載・肖柏・宗長等の所謂連歌師なるもの相踵いで出で、世に宗匠として持囃されて居る。殊に宗祇は新撰菟玖波集を撰し、今に最も有名である。元來連歌そのものが一種の道樂文藝なるに、連歌師の徒は多く諸國を行脚して、その弘通を圖つたので、全國に互つて流行し、大内氏にありても、政弘の如き熱心家を出したのである。連歌の外に、謠曲能樂も東山時代にその四座定まると共に盛んに流行を來し、京都の上下のみならず、地方武士の間にも、儀式遊宴の席などには興行せられ、連歌と共に幕府諸侯などの年頭恒例の行事とまでなつた。所謂連歌始めや能始めである。されど曲直瀬道三も言へるが如く、「連歌者遊客桑門之家業、亂舞者同朋猿樂之勤藝」で、武士の本領とは見られなかつたやうである。

この外、足利時代には美術工藝の進歩も著しきものあり、茶ノ湯を中心としての藝術は貿易の影響によつて益々發達せしめられた。周文・雪舟・元信を出した繪畫は素より、建築彫刻及び染織等に至るまで、各々その時代の特色を具へ、繼て來る復興期に之を傳へて居るが、大内氏はまた此等にも特殊の關係があるのである。

如上の事柄、殊に文藝に關するものは、その本源は多く文化の中心地たる京師にあつた。大内氏は種々の機會に於て之を攝取した譯であるが、それには大内氏の根據たる山口の地形が天然自然に京都のそれに似通へることも、また多少の便宜を與へたこと、思はれる。山口の地たるや、東西北の三面山を以て圍まれ、椹野川かじのの兩流その間を流るゝあつて、恰も京都の形勢に髣髴たるものがある。されば當時既に西國に於ける小京都と呼ばれ、地名その外京洛のそれに模したるものが澤山にある。東山・象頭

山一帶の翠巒は蒲團著て寢たる姿の東山に比すべく、榎野川の水上に鎮座まします仁壁神社は賀茂の宮居にさも似たり、氏寺として尊崇篤かりし氷上山興隆寺は王城の鎮護たりし比叡山延曆寺の如く、その北辰妙見は恰も日吉山王に當るものである。その他、春日・北野・熊野・愛宕・貴船などの諸社及び八阪・清水・長谷・鳴瀧・吉田・平野・嵯峨・清瀧・松尾・梅尾などの名所のみならず、山口市街の町名にも大殿小路・小局小路・太刀賣町など都ながらの呼名を付けたるが、更に鰐石川の螢、古熊山の松皮付、さては松茸鮎魚に至るまで、洛中洛外の其等に較べ考ふれば、嘗に人工的の模倣のみならず、風土氣候の類似さへ知られて、思ひ半に過ぐるものがあるであらう。

京都を中心としたる内國文化と共に、支那朝鮮西洋等の外國文化の影響もまた極めて著しいものがある。足利義滿の政策により支那朝鮮との交通貿易盛んとなり、幕府を始め諸侯などの争うて之に従事したことは、言ふまでもなく周知の事實であるが、中にも大内氏は最も著しきものであつた。古き琳聖の昔は問はず、後年天下の大諸侯となり、中國西國の重鎮として、海外交通の關門を扼したれば、外國文化の輸入にはこよなき有利の位置にあつた。

大内氏と朝鮮即ち高麗との關係は義弘の時が初見である。恰も將軍義滿時代で、康曆元年高麗の使者韓國柱、九州探題今川了俊の許に來れるを、義弘朴居士といへる者をして之を高麗に送らしめたことがある。また應永五年には幕命によつて韓使を接待し、一切經を得たこともある。此等の事實を始めとし、盛見の時には、應永十四年使僧を高麗に遣して同じく一切經を求めたるが、爾來義隆に至るまで、彼我使節の往來絶ゆることなく、嘗に文化的資料を得たるのみならず、また財用の供給、兵力の

援助をさへ求めて居る。

次に支那との關係は、我が南北朝の末に當り、趙秩庸なる者山口に來つて山口十境の詩を作れるを以て初見とする。當時支那は明時代で、その貿易は我に非常なる利益を與へたれば、足利幕府は義滿以來、名分を亂してまでも之を行ひ、部下の細川・大内等の大諸侯並に京畿の諸大寺なども同じく從事したものである。而してその貿易は明國より與へられたる貿易免許の相印ともいふべき勘合に據つて行はれた。即ち彼の朝の代替り毎に勘合一百通を我が幕府に渡し置き、渡航船は之を貰ひ受けて行き、彼の國にある原簿と合札とを對照せる上にて入國を許されたのである。然るに戰國時代となり、幕府の實權失墜と共に、元來形勝の位置にありし大内氏は、義興の時遂に幕府より勘合の保管を依託さるゝことゝなつた。是に於て貿易の全權大内氏の手に歸し、彌々その利を獨占して富強を積むと共に、益々大陸文明の吸収に力めたのである。また曩に義滿の時、明主より賜はり、爾來彼の國への疏などに用ひ來つた有名なる「日本國王」の金印も何時しか紛失してしまつたので、大内氏は木製の模造品を作り、之を將軍よりの疏に捺したやうであるが、後、義長の時之を自家の文書に使用して、明朝より撥ね付けられたことがある。この日本國王の印及び朝鮮との勘合の印などは今も毛利公爵家に傳へられてある。兎に角大内氏の足利時代に於ける大陸貿易は全國無比のものであつた。されば支那朝鮮の商賈等の渡來せるもの多かりしが如く、今の小郡町の附近嘉川村深溝あたりはその海驛の一であつた。圖書編の日本國序に翁哥里澳とあるは即ち小郡であらうと思はれる。また外人の山口に來れるものは、之を築山の館に近き唐人小路の外客館に置いたといふことである。

支那朝鮮の外に西洋との關係もまた看過することはできぬ。ゼスイット教の開祖イグナチオ・ロヨラの僚輩たるフランシスコ・シャヴィエルが印度布教の際、薩摩に渡來し、去つて豊後に布教したが、全國布教の許可を得んがために京都に上らんとし、その途中、山口に立ち寄り、義隆に謁見した。是れ實に大内氏西洋關係の嚆矢で、天文十九年(西曆千五百五十年)九月のことである。その後シャヴィエルは一旦上京し、翌年再び下向して宣教の許可を得たれば、熱烈なる宣傳を行ひ、僅か二箇月にして五百人の被洗禮者を出すに至つたが、臈てコスモ・ド・トローレーを平戸より招きて山口の布教を託し、己は同年八月上旬その地を去つて豊後に赴いた。然るに間もなく同月二十八日に陶の叛亂勃發して、義隆は弑せられ、尋いで迎へられし義長もまた程なく滅亡せるを以て、大内氏の西洋關係は極めて短日月のものであつた。随つてその影響するところも泰西文明の片鱗に過ぎなかつたが、宣教師の期待大なりしだけそれだけ一時的影響は案外に多かつたやうである。

之を要するに、大内氏はその政治經濟的發展に伴ひ、種々時勢の影響を受けて、茲に全國無比の文化を誇るに至つたのであるが、社稷の滅亡と共に何時しか湮滅して、その面影の幾分のみを知るに過ぎないのは、洵に遺憾の次第である。今その大略、殊に文藝を主として説いて見たいと思ふ。

#### 四 和歌連歌

和歌は古來公家の専門とするところ、連歌もまた公家に興り、連歌師によつて流布せられたものであれば、此等は京都を以て中心として居たのである。大内氏は夙くより京都に關係を有てるのみならず、傳統的にも公家の素質を具へたれば、歌道の事蹟は最も著しきものがある。而してその初見は義

弘の時にあるのである。

義弘は驍勇無雙の武將にして、而も一介の武弁にあらず、文治的手腕の見るべきものありしことは既に述べたるところである。随つて文學趣味も淺からず、最も和歌に堪能であつて、新後拾遺和歌集の作者に列するの名譽を擔つて居る。同集、雜、春ノ歌の中に

日數のみふるのわさ田の梅雨に

ほさぬ袖にも取る早苗哉

とある。盛見の氷上興隆寺本堂以下再建供養會の願文に、「列勅撰之作者」と謂へるは之を指したものであらう。なほ周鳳の臥雲日件録によれば、將軍義滿會て伏見の花を見んがために木幡の里に到れるに、天俄に陰りて雨降らんとしければ、義弘命に應じて、

雨しはし雲にやすらへ木幡山

伏見の花を行てみん程

と一首の和歌を詠んだところ、不思議に天霽れて雨は降らなかつたといふ話がある。和歌の徳、天を感應させたか何うか、それは保證の限りでないが、義弘が歌人として名高かつたことは、之によつても想ひ遣られる。義弘はまた連歌にも巧者であつたことは、實隆公記に斯道の先覺二條良基より義弘へ連歌十問最秘抄を興へたことを言へるにても知られる。この抄は世に香積寺抄と稱するものである。斯かる歌道の好者すきしゃであれば、彼の應永の亂に當り、最後の仕度を急ぎながら、和歌百首連歌千句を作つたとの傳へも、無下に棄つべきものでなく、英雄胸中の閑日月を語るものとしてみたい。況んやそ

の軍に加はつて、弘茂等と共に堺城の東郷を守られた師成親王が、落城後山口に下向せられて、大内氏の歌道に大關係を有つて御座るを見れば、愈々義弘の文功を思はざるを得ぬのである。

兵部卿師成親王は後村上天皇の皇子で、當時有數の歌人であつたことは、歌書の奥書などに親王の御筆に成れるもの今も往々これ有るによつても知らるゝが、斯かる御方が山口に下向せられたために、盛見・教弘を始めとし、大内氏の上下に歌道の好者を輩出せしめたことは事實である。親王は山口下向の後、瀧の法泉寺に居られ、入道して竺源惠梵と稱せられた。大内氏實錄の著者近藤清石翁等の説に據れば、親王は遂に此處に薨じ、その御墓所を御廟野と呼ぶといふことである。成る程、今も夫れかど見ゆる墓はあるが、親王の叔父君宗良親王後醍醐天皇の皇子の輯め給うた新葉和歌集の古寫本京都富岡氏所藏の奥書に據れば、後年伊勢國安藝郡にも居られたことが見えるから、未だ遽かに山口を以て御終焉の地と斷定することはでき難い。尤も他にその傳説地さへあるを聞かない上に、右古寫本奥書の續きに、永享十二年持世の時桑門智明なる者周防國高藏山下の私第に於て親王御自筆の本を書寫したことが見えて居るか、或は後復た山口に下られたのであるかも知れぬ。

義弘の戦死後、家兄の恨を忘れて幕府に降つた弘茂には、別に文學上の所傳はない。之に反して、遺託を奉じて幕軍に抗し、防長二州を累卵の危きに保つた盛見は實に文武兼備の名將であつた。その文事的事蹟は多く修禪の方面に現はれたるが、また歌道の上に於ても、彼の師成親王を迎へて傳授を受け、無時當双の熱心家たりしことは、花山院長親の畊雲千首佐々木信綱氏所藏の奥書に「爰防州太守大夫居士、○盛有志見于此道、當世無比倫、故與予有方外之交、因磨老眼、再寫此詠而寄座右」とあるにても知られるであ



らう。長親は有名なる花山院師親の孫で、畊雲散人明魏と號し、初め南朝に仕へたりしが、合一後は將軍義滿・義持の崇敬を受け、有職故實の學は素より、歌道に於ても天下第一と稱せられ、一世を風靡した人である。盛見は斯かる師友を有し、且つ前述の師成親王にも親しく誘掖せられたれば、その發達の程も推して知るべきであるが、その詠什は未だ發見するを得ぬ。新續古今和歌集卷第十七の雜歌に

月の歌の中に  
廻りあはむ頼を月に契ても

我が世更け行く秋ぞはかなき

といふ一首が多々良成見として收めてあるが、或は成見は盛見ではあるまいか、尙ほ後考を俟つ次第である。

盛見の後、兄持盛を殺して家督を領した持世もまた多年彼の畊雲山人明魏に就いて歌學を修めた。畊雲會て將軍義持の命によつて百首を詠じ、題して雲窓贖語と名付けたるが、之を持世に與ふるとて、その跋に「此百首、依征夷府持ノ嚴命、凌老屈所詠也、大内刑部持有志於此道、從予勤學已久矣、仍書此百首以授之、以爲進修之張本者也」と書いて居る。されば持世は時人より歌人として許され、朝廷よりは歌道秀逸の故を以て特に從四位に叙せられたといふことで、新續古今和歌集の作者にも列せられ、三首ばかり收めてある。卷第五、秋歌の下に、

嶺におふる松にも今や通ふらん

稻葉の風のゆふぐれの聲

卷第六、冬歌に、

題しらす

さらでだに干さぬ袖師の浦衛

いかにせよとて寐覺とふらん

卷第十四、戀歌の三に、

行きめぐり猶此の世にと頼むかな

命をかざる別ならねば

或る時將軍義教平日自製の和歌を寫して持世の點を求めたところ、持世は之に加點する代りに、二首の歌を詠んで献じた。

みわたせは伊勢の濱萩一本の

あしと云へき言葉ことばもなし

おもひきや筑紫の海のはてまでも

わかの浦浪かゝるへしとは

これは臥雲日伴錄に見えたるが、筑紫の海の果てまでも和歌の浦浪かゝる名譽は、この人にして得られたのである。

持世はまた連歌をも善くし、後に宗祇の撰んだ新撰菟玖波集に多々良持世朝臣として六句ばかり入れてある。

秋のあはれもたゞこゝろから

たれもみなぬるよの月をひとりみて

秋風さひしこけのさころも

露木葉もらぬいはやはしつかにて

かたみにとむることのはもかな

ありへての後の夕へもしらぬ身に

はらひもあへぬ袖の上露

月をやと草を枕にかりねして

音のさむきは風かあられか

篠の葉のさらにねられぬ月の上に

この外、持世の詠と稱する懷紙短冊なども、世間に往々あるやうである。

盛見の實子で持世の後を繼いだ教弘はまた歌道の嗜み深く、山口に下向せられた兵部卿師成親王に就いて之を學び、その御筆の李花集を頂戴致したことがある。同集古寫本の奥書に「此本書、先師兵部

卿師成親王

出家號 惠梵

筆跡也、教弘相傳之、

昔享德改元仲冬廿日

多々良朝臣印判」とあるを以て明か

であらう。李集花は後醍醐天皇の皇子宗良親王の御歌集である。親王は南朝のために遠江信濃等に於て盛んに活動せられ、世に信濃の宮と申して、有名な御方であるが、また當時有数の歌人であつて、彼の新葉和歌集もその御撰であることは前述の通りである。師成親王はこの信濃宮の御甥に當り、且

つ同じ道に志深き御方であれば、叔父君の御歌集を持ち傳へられたるは當然のことで、それを教弘に下されたのである。斯かる親善の關係なれば、大内氏の築山邸内なる築山大明神は、表面教弘の靈と稱したれど、その實教弘が親王の御靈を祀つたものとの傳説もある。教弘はまた連歌をも善くし、新撰菟玖波集には贈從三位教弘として七句程收めてある。

あはする日をもえらふたきもの

うちしめり物のさひしき春雨に

時雨又ふる秋のあかつき

むら雲にいくたひ月の出ぬらん

まつらはいかにみつのうきどり

うちはらふ袖さへ雪のつもる夜に

淺茅生の野邊の秋風身にしてみて

おもふもかなしなき人のあと

とほれん物か山かけのはる

花たにも世のかすならぬ宿しめて

ほしのあふせはさそなうれしき

我またぬ秋のはつかせ今朝吹て

こゝろそしるへ世中のみち

佛よりさきにをしへし主やたれ

教弘の子政弘は應仁の亂の大立物で、その一生は兵馬倥傯の間に過ぎたが、文學上でもまた特筆すべき人である。殊に歌道に於ては、父祖の風韻を傳へたるが上に、久しく京畿に在つて公家や連歌師などとの交際も深く、非凡の技倆を示すと共に、熱心なる斯道の保護者であつた。有名なる三條西實隆道遙と親交ありしことは、實隆公記其他によつて想見せらるゝが、和歌相傳系圖には其門人となつて居る。又連歌師猪苗代兼載が政弘の終焉を記せる朝の雲には、終焉の夕迄も斯の道に志深かりし事や、詠み置きし和歌連歌の數いと多き事が述べてある。先づ其和歌に就いては、拾塵集といふ歌集が有て、一重なる人もぞあると世を知れば

薄き衾もさるぬ夜半哉

の一首は、畏くも延喜の帝の聖徳を偲ばしめ、

たよりなき外山にすみてしづ枝をも

をることかたき峯の椎柴

の詠は、當に源三位頼政の故事を思ひ起さしめる。政弘が是によつて従四位下に叙せられたといふ逸話は玉勝間にも載せてある。なほ明應四年卒去の年の春、母に後れて忌に籠れる時、梅花を見て詠んだ歌に、

たましゐをかへす匂ひはなかりけり

なき人こふる宿の梅がえ

といふ名吟もある。三條公敦これに和して、

なき人のめてし心はかへりきて

みるらむものを庭の梅がえ

と詠んで贈つた。

而して政弘の文學上最も著しき功績を遺したるは實に連歌である。有名なる連歌師宗祇の宗祇法師集・老葉・筑紫道記、兼載の朝の雲、宗長の宇津山記・東路の津登などに據れば、此等の宗匠達は何れも政弘との交り深く、屢々雅筵を共にして居るが、宗祇・宗長の如きは山口にも往來したことがある。中にも宗祇は最も親交あり、文明十二年山口に下向して、道場門前なる本國寺を宿坊として滞在し、政弘を始め公家衆や家人等と共に時々折々の雅興を催したのであるが、伊勢物語山口抄の跋に據れば、この後延徳の初め頃にもまた山口に於てこの物語を講釋したことが知られる。なほ實隆公記には政弘より連歌十問最秘抄香積寺抄の新寫の奥書を宗祇に所望せること見え、宗祇もまたその詠草・萱草・老葉を政弘に贈れるなど、兩者の親密を語るべき料は少からぬのである。然るにその最も特筆すべきものは、宗祇が畢生の事業とせし新撰菟玖波集に於ける關係である。この集は、その序文に據れば、一條冬良が宗祇等をして撰ばしめたといふことで、永享の頃より明應に至る間の連歌が收めてあるが、明應四年六月に成り、やがて勅撰に准せられたものである。連歌の集としては、彼の二條良基の菟玖波集と共に最も名高く、永く後世に範を垂れて居る。宗祇が之を奉行したるは、勿論冬良を戴いてのことであらうが、その起因は實に政弘の慫慂にあるのである。そは兼載が朝の雲に「新撰菟玖波集はかの○政弘す、

め申されしゆへとぞ」とで、「絶ぬべきつらなる哥の道を殘しえらぶしるべと成しかし」と感稱せるを以ても知らるゝが、また明應四年八月二十五日付にて肥後の國人吉の城主相良左衛門忠爲續より政弘に贈つた書狀に「次新撰菟玖波集、以御意見被思立候由、去春自見外齋宗被申下候、殊近日成就之段、自祇載宗祇被申候」とあるによりて、愈々その事實たることを確め得るのである。なほ後土御門院長州一宮住吉社御法樂和歌の奥に三條西實隆の記すところによれば、この一卷は宗祇が新菟玖波集修撰の時、同社に素願成就を祈り、首尾好く成功を遂げたので、主上を始め親王門跡堂上公卿等に法樂の和歌百首を請ひ受けて奉納したものであるが、是れ亦政弘との縁故に因れることで、政弘は家人相良正任ただたう及び杉武明をして之を同社に奉納せしめ、閩外不出と定めたのである。また彼の相良爲續書狀に「愚句已下此集之内候、過分之至候、依尊意、從上一仁、末代之名譽候、忝奉存候」と述べ、同じ書狀の裏書に、相良正任が「左衛門尉爲續句令入于此集給事、偏依從四位上左京兆尹多々良政弘朝臣御芳恩、達名望之旨、一段忝之由、連々蒙仰之通、某正任存知彼御素意之間、今日○永正三年六月廿日相嘗七回忌、追慕愁歎之餘、披尊書拜見之次、不顧憚、於彼玉章之裏令書寫彼御句五句、以奉獻呈無量壽院殿西華蓮船大禪定門○爲續眞前、擬稱名念佛回向所希云爾」と言へるを以て見れば、爲續の句の新菟玖波集に入れるも、政弘の周旋に因つたことが分かる。元來肥後の相良家は、九州諸侯の中にあつても、文學事蹟の多い方であるが、殊に十三代爲續は最も連歌に執心し、宗祇とも方外の交りあり、互にその影像を贈つて相見ぬ心遣りとしたはごあつて、新菟玖波集には九州唯一の入選者であつた。是は全く同姓正任などの關係により、政弘とも親善であつたためである。序ながら、正任は相良氏の一族で、遠江守に任官

し、入道して正任しやうしんと稱した。本國を去つて大内家に仕へ、政弘の信任を得て奉行となり、政治に關係せるのみならず、和歌連歌等の文學を以ても格別の寵遇を受けて居た。されば政弘の卒去に遇ふや、朝の雲に「折節正任法師は、若き時よりひるよるわかず病の床つゐの薙まつかへけるに、このなけきに心地れいならぬよし申て、せうそこのついでに、くるしむも中くうれしかゝらずばなきみかけをや猶も忘れん」とあるが如く、哀別の情切なるものがあつた。兎に角政弘と宗祇並に新菟玖波集との關係は世の常ならぬものであつたのである。されば同集を見れば、政弘の句が餘程澤山に載せてある。上御一人を始め、都合二百五十三人、二千五十三句のうち、宗砌の百十四句、後土御門天皇の百九句に亞いでは、政弘の七十五句であつて、實に平均數の約九倍に當つて居る。是は同集に對する政弘の關係を語ると共に、また斯の道の達人たりしことを示すものである。今その選句の幾分を擧ぐれば、

春連歌上に、

あふうれしさの春はきにけり

植しとき待とをなりし花さきて

夏連歌に、

ひとつふたつ花の夕良あらはれて

たそかれとくにほたるとふかけ

秋連歌下に、

おもひもかけぬこそのおもかけ



野分せし今朝はいつくもあらはにて

冬連歌に、

人はしづかに冬こもるさと

たきゝこるをのゝひときにみねさえて

雑連歌一に、

はちすの上をねがふ彼國

人の世のなごりにしまぬ月をみて

同一に、

さぞなすがたもかはり行らん

住なれて聲ひなひたる都人

同一に、

むまれきてわがすめるこの國

なにこともよしあしはらのかりの世に

神祇連歌に、

たいすぐなるを心とも見よ

ありなしもしらぬは神のかたちにて

發句上に、

落花の發句に

散やうきしらぬは花の心かな

同下に、

神無月の比の連歌に

秋はなを薄にのこる枯野かな

此等の中には感想述懐の外に社會の實相を詠んだものもあつて、政弘の文學思想人格を想見するに足るのである。連歌師兼載がその死を悼んで、「やまごこの葉にこゝろをしめ、みぬもろこしのことわさまでもとめつゝ、風月に心をすまし、仁徳世にすぐれ給ひしに」と追慕し、三條公敦が「むかしやはものゝふの道文の道そなへてあたら人をしそ思ふ」と嘆惜措かざるも理りである。實に政弘の如きは文武兼備の名將たるのみならず、また我が文學史上の一大恩人と謂つべきであらう。

隨つて政弘の部下にも前述の相良正任を始め、陶弘護・右田弘詮・内藤護道・門司家親・同能秀・杉弘相・千手治部少輔など、風雅の道に心を寄せたりしもの少なからず、中にも正任は新撰菟玖波集の作者に列し、三句ばかり入選して居る。冬連歌の中に、

けふれるいろそふかくなりぬる

山みつの雪に一すちたえやらて

政弘に繼いで大内氏の全盛時代を現出せしめた義興もまた風雅の志淺からず、管領代として天下の政柄を執れる頃、永正八年十二月二十五日、降り積れる雪の風情を愛でつゝ、洛外嵯峨野に馬を驅つて、

西芳寺の佳境に到り、眞白き比叡の高嶺を望みて、東路の芙蓉の姿も斯くやとばかりに、かくばかり遠き吾妻の不二がねを

今ぞみやこの雪の曙

と詠じたるが、武士に似合はぬ殊勝なりとて、翌年の春、伏見宮貞敦親王を始めまつり、前關白一條冬良・同近衛尙通・前左大臣菊亭公興・前内大臣三條西實隆・内大臣三條實香等十三人の公卿の和答があつた。この事何時しか後柏原天皇の天聽に達し、畏くも

雪に見し山は不二がね言の葉の

世々の其名も雲の上まで

といふ御製の宸翰を賜はつた。義興以て無上の光榮となし、之を一卷の集として、三條實香に託してその由來を書き記さしめたものが、今も現に残つて居る。異本義隆記によれば、將軍義植もまた自詠を贈つたといふことであるが、何れにしても君臣和樂の様が偲ばれて、奥床しさの限りである。義興はなほ連歌師宗碩を山口に召し下して、古今の傳授も受けて居る。この古今傳授といふことは、彼の關ヶ原役に當り、細川の幽齋が丹後の田邊城より救はれし名高き話もある如く、歌道の上にては最も重き事として、容易に許されなかつたものである。然るに義興武家にして之を相承せるは、また以て異數のこと、謂ふべきである。

義興の次は即ち義隆である。文弱と稱せらるゝほどありて、文學には頗る熱心で、歌道もまた盛んであつた。その師範は二條流の飛鳥井雅俊や冷泉流の堯淵僧正等であつたが、食客たりし多數の公家

衆も皆その相手を勤めたこと、思はれる。しかのみならず當時名高き連歌師の里村昌休や北野の能祐・堺の宗養なども山口に招かれて下向したことがある。随つて義隆の詠歌吟句は澤山にあつたに相違ないが、歌集等もなければ、遺憾ながら多くを知ることができぬのである。その確なる一例としては、下ノ關市赤間宮所藏の國寶懷古詩歌帖中にある自筆の短冊がある。

さかならぬ君かうき名を留をき

世にうらめしき春のうら波 義隆

なほ義隆記・中國治亂記・陰徳太平記などにも此處彼處に散見して居る。此等の諸書のものとは勿論妄信することはできぬが、中に法泉寺にて彌生七日の歌に、

わすれずば又も來りてもろこしの

よしや吉野の花のなこりを

保壽寺にて糸櫻を見し折の歌に、

空のみか枝にうちはへいとゆふの

花にも葉にもぬき亂れゆく

などいふのがあつて、世間に傳へられて居る。また諸軍記に、大寧寺での最後の辭世として、

討つ人も討たる、人も諸共に

如露亦如電應作如是觀

といふ歌が載せてあるが、是は近藤翁も云へるが如く、義隆記及びその異本等に「義隆ヲ初メ奉リ、各

歌ヲヨミ玉ヘトモ、煙トヤナリケン、聞エズ候、」とあるのが、當時の事情に適へるものと思はれる。

義隆既に歌道に志淺からず、随つてその妻妾家人等の之に關する事蹟も乏しくない。中にも夫人萬里小路氏貞子は名高く、曾て義隆より或る女の許に遣せる艶書を使者の誤りて持ち來れるを見て、その文に

頼むなよ行未かけてかはらじと

われにもいひし言の葉の露

と詠み添へて送り、義隆の許へは

思ふことふたつありその濱千鳥

ふみちがへたる跡をこそ見れ

と、眞綿で頸の意見を呈し、更に彼の女の許に

身をつみて人のいたさぞしられける

こひしかるらんこひしかりけり

と詠んで遣したといふことで、古來その婦徳を稱せられて居るが、その出典たる武者物語や和論語などは權威ある史料としては保證の限りでない。次に家人の中にも、冷泉判官隆豊や相良遠江守武任○正任の子など、斯道の上手が少くなかつた。隆豊は大内弘世の子弘正の子孫である。父興豊の時、その母

冷泉少納言の女なるにより、大内を改めて冷泉と稱したことを以て見れば、隆豊は先天的に歌人の素質を具へて居たこと、思はれるが、また周圍の感化にもより、最も和歌に巧であつた。而のみならず、武

勇拔群、忠誠無比で、國難の際は、終始主君義隆を守護し、遂に大寧寺に於て殉死した。  
見よやたつ煙も雲も半天そらに

さそひし風の末も残らず

とはその時の辭世で、之を一切經の表紙に血を以て書き置いたと傳へられて居る。事の眞偽は姑らく措くも、また以て隆豐平生の素養を語るものといふべきであらう。後世その子孫に和歌國學の天才冷泉古風を生んだのも、決して偶然ではないのである。相良武任は正任の子で、父に劣らぬ歌道の巧者であつた。天文十九年陶晴賢との不和により、石州津和野に出奔し、尋いで九州に下れる時の歌に、  
うつ蟬のつくしよしとは思はねど

身はもぬけつゝなくくぞ行く

といふのがあつて、眞跡が傳はつて居るといふことである。隆豐武任の如き高級の人々のみならず、下々にまでも風雅の道は行き渡つて居た。陶晴賢の同朋宗阿彌は和歌を好み、狂言作者の渡邊可性は狂歌を善くした。二人共に、嚴島の役に毛利氏のために捕へられたが、元就の命のまに／＼宗阿彌は、  
名を惜む人どしいへど身を惜む  
をしさにかへて名をば惜まじ

と即吟し、可性は毛利氏の兵注連繩を二重襦として相印とせしに因んで、  
懸てしも頼むやもりのしめだすき

命ひとつに二つまきして

と、是れ亦立ち所に詠み出でたれば、命惜しさの歌ながら、その即吟を愛でられて、共々に赦免せられたといふことである。舊長藩の連歌師阿部眞貞の言葉の徳には、この兩人の歌を評して、「時ノ運ニヨリ場所ニヨル事ニテ、必一向ニハ論カタシ」と云つて居るが、蓋し適評であるかも知れぬ。

此の如く我が大内氏は歴代上下共に和歌連歌には最も志が深かつた。さればその名殘であるか、近代までも、山口名題の祇園祭には、連歌堂にて七日の間、一日百韻の連歌が興行されたといふことである。

## 伊 木 壽 一